校友時報

昭和55年10月11日
編集人兼発行所
秋田県能代市高塙2番1号
秋田県立能代高等学校新聞部
印刷所㈱大勝堂印刷

不安つのる生徒会

さる九月二十九日に、やっと生徒会役員と応援団長が決まった。しかし、毎年、選挙運動と生徒会運営の低調ぶりがひどくなっており、今後の考慮が必要となっている。

波乱づくめで終わる
清水新会長に大きな期待

九月二十九日に、生徒会長、副会長の決戦投票が行われた。その結果、会長には清水和久君（二E）、副会長には荘司洋士君（二G）がそれぞれ選出された。

投票の結果は、次の通りである。

生徒会長
当選　清水和久
次点　渡辺正純

同副会長
当選　荘司洋士
次点　伊藤和博

応援団長
信任　小林隆一

新副会長荘司君

新会長清水君

九月二十日、生徒会役員の応援団長の決定が行われた。その二次後、選挙運動は、切見られなかったことをはじめ、立会演説会も、全くその意義をなさない、各立候補者の無気力が目についた。

例えば、立候補者に公約らしいものが全くなく、壇上で名前を連呼するだけというのがほとんどだった。言うだけというのがほとんどだった。

また、立候補者たちに共通していることは"ハングリー精神"と呼ばれるものである。直訳すれば"空腹な精神"であるが、何事にも積極的に、かつ、どん欲に取り組み自分の可能性の追求をやめないこと、の意味をもつ。つまりは"努力"と"信念"である。努力を忘れず、信念を貫き通すことの価値が認められたとともに、その大切さを説いたものといえよう。

このように、プロ野球選手たちは、記録ラッシュと言われるほど、すばらしい記録がたくさん出た。福本選手の八百盗塁、張本選手の三千本安打、野村選手の三千試合出場など、まさに"金字塔"の数々である。先に挙げた三つは全て日本球界前人未踏の大記録であるが、この栄光が生まれるまでには、はかりしれない苦労があることを忘れてはならない。

福本選手は生来、小柄な体格で、入団当初は他の選手があまりに大きく、みえ「こんな世界で通用するのだろうか」と後悔の念をもったという。張本選手は韓国人というハンディがあったし、野村選手は幼い頃、父に死なれ、母が病いに倒れるという不幸な生い立ちがある。

このようなハンディを背負いながらがんばった選手たちに共通していることは"ハングリー精神"と呼ばれるものである。直訳すれば"空腹な精神"であるが、何事にも積極的に、かつ、どん欲に取り組み自分の可能性の追求をやめないこと、の意味をもつ。つまりは"努力"と"信念"である。努力を忘れず、信念を貫き通すことの価値が認められたとともに、その大切さを説いたものといえよう。

プロ精神に学ぶ

今回の選挙は、盛り上がりに欠け、言うだけというのがほとんどだった低調ぶりや、立候補者の一人が、ギターをかかえて歌を歌ってアピールするなど前代未聞のハプニング、さらには聴衆との質疑応答の末、壇上から落ちる立候補者もいるなどの波乱づくめであった。まさにやる気のなさの象徴といえる現実であった。

清水新会長の談話では、「前回の生徒会は手ますます成功した」と思っている。そして、僕には、その伝統を受け継ぐ義務がある。今後は、努力と実行力をモットーとして、生徒達みんなと、助け合い、協力しながら、生徒会をもっとよりよい方向にもっていきたい」と思う」と語り、今後の生徒会への意気込みの片鱗を感じさせたものの、具体性に乏しく一抹の不安を残している。今こそ"努力"というものの尊さを学ぶときが来、これを実践するときが来たと言える。

とかく、我々の世代は、物質に恵まれすぎて苦労を知らないなどと批判されるものになも昔の物質に恵まれなかった時代を顧みる必要はない。我々の人生は物質のあるところからスタートしているのだから、そこから自分の人生の形成に"努力"すればいいのである。大学受験の関門を突破した後の人生も、新たなる目標をたて、自分自身の人生形成は、自分自身の"努力"にあるということを、はっきと踏まえておけば、不安な未来を自分で満足のゆく、幸福なものにすることができるだろう。

しかしながら、客観的な見方をすると、総とありにも生徒一人一人の生徒会への関心が薄すぎるのではないだろうか。清水新会長には、五四八票、荘司新副会長には、六七一票と、過半数の指示を得た点では、前回よりは多少有利な要素を思わせるものの、無効投票は相当数あることから、依然生徒の無関心さは消えない。

このような状態では、生徒会役員がいくらがんばっても、生徒会は盛り上がらず、これからの活動に支障をきたすのは、必至である。生徒会の会員生徒に対する信頼の欠如といえばそれまでだが、もっと生徒自身が生徒会に真剣に取りくむ姿勢が必要ではないだろうか。「このような生徒会だったらないほうがましである」の声も一部に聞かれる。しかし、生徒会がなくなったら一番困るのは、生徒自身である。それゆえに、もっと生徒会に関心を持ち、生徒会を信頼して、盛り上げていかなければならないであろう。

多くの問題を山積みした生徒会をはたして、新会長の言葉通り、よりよい方向に向かってゆけるだろうか。清水新会長の運営手腕に期待される。

季節の窓

真萩散る
庭の秋風身にしみて
夕日の影ぞ壁に消えゆく

永福　門院

赤い小さな萩が散る庭。その庭を吹く風が身にしみる。ああ、私はひとり、ここにいるのだ、自壁に射していた夕日の光さえも、かげりながら消えゆく。

弁論大会
現代教育を鋭く分析

九月十六日放課後、視聴覚室で第三回校内弁論大会が開かれた。

"現代教育に欠けているもの"というのが、今回のテーマであり、二年生四名、三年生三名の計七名の弁士が出場した。それぞれが、自分なりに現代教育を鋭く分析し、熱の込もった弁論を繰り広げた。審査員の一人である岡先生は、審査規準の「態度・構成・内容・感銘度」の四つの点から総評を次のように語ってくれた。「態度は、各弁士とも堂々としていてよかった。中には、姿勢が悪い人や、また原稿が真に自分のものになっていないため、ただ棒読みになってしまう人もいたのは残念である。また、構成・内容は、テーマが難しかったため、例示と自分の主張がかみ合わず、結論も希薄になってしまったようだ。そして、感銘度は、一生懸命訴えようとする姿勢が感じられて大変よかった。特に自分のユニークな体験がもられていたものは、やはり説得力があったし、感銘度も自然と高くなっていたようだった」

今回のテーマは、現代教育を指摘した、現在の我々に最も関係の深いものだった。そのせいか、当日会場には、放課後だったにもかかわらず、「このテーマに対し、自分と同世代の人たちがどう考えているかを聞こう」という生徒を始め、校長先生他、数名の先生方も自然と高くなっていたようだった。

優勝の喜びをかみしめて

なお、かなり多くの聴衆がつめかけた。始まる時間が少し遅れたせいか、初めのうち会場はさわついていたが、一番目の弁論が始まると、どの人も熱心に聞き入っていた。しかし、一人の人の弁論が終わるたびに会場を出て行く人が目につき、そのため、会場は落ち着かず、不愉快な感じを与えた。

結果、須藤陽子さん（二C）の「受験世代に考えること」が一位に、また佐藤浩之君（三G）の「祖父の家庭教育法」が二位に、そして渡辺正純君（二F）の「そして心を」と、佐々木薫さん（二C）の「心の旅が始まる時」が三位入賞に輝いた。第一位の須藤さんは、今大会について「今回の統一テーマである『現代教育に欠けているもの』は、私にとって大きすぎました。そのために、内容もうわすべりの感ぬぐえなかったと反省しています」と語ってくれた。

尚、須藤さんは、十一月一日に国学院大学で開かれる"全国弁論大会"に、本校代表として出場する予定である。

通交
規則正しい走行を

交通委員による街頭指導が、九月二十四日（朝八時二十五分～四十五分）にわたって行われた。指導場所は、幸坂ガソリンスタンド前、学校前（押ボタン信号前）だった。

重視した点は、自転車が三列以上になっていないか。信号無視をしていないかの二点だった。

その結果次のことが、反省すべき点としてあげられた。㈠自転車通学者が二列までしか認められていないのに、三列以上になってしまうこと。こういう乗り方をすると車道に出て来てしまい、非常に危険である。㈡信号が変わって急に止まるときブレーキがきかず、前の自転車に追突してしまうこと。従って自転車の十二分な点検が必要である。また、いくら車がなくても、信号を守ることは交通ルールに最も大切なことであるから、信号無視は絶対しないように。さらに部で帰りが遅くなる人は、日没前までに走行するようにとのことだった。㈢徒歩通学者も二列までが限度とされているが、どうしてもそれ以上になってしまうこと。これは、自動車や自転車の通行の邪魔になる上、接触事故に巻き込まれかねないので、特に注意を要するとのことだった。

一方よかったこととしては、スピードを出して競争する人が、いなくなったのがあげられていた。

なお市内の自転車通学者が、安全に規則正しく走行ができるために、もっと早く家を出るように心がけてもらいたいものだ。

交通マナーを問う

以前に、通学区域の住民から、自転車の四列走行をしている本校生徒に注意したら、悪質な口答えをされたと学校に抗議があった。この抗議が受けられない場合には、新聞投書を辞さないという厳しいものであったという。

このことからも、歩道の走行は、常に歩行者優先をモットーにして欲しい、と指導部では呼びかけている。

交通マナーを問う

以前に、通学区域の住民から、自転車の四列走行をしている本校生徒に注意したら、悪質な口答えをされたと学校に抗議があった。この抗議が受けられない場合には、新聞投書を辞さないという厳しいものであったという。

このことからも、歩道の走行は、常に歩行者優先をモットーにして欲しい、と指導部では呼びかけている。

臨時総会
茶道"部"に昇格

九月二十五日の四校時、立会演説会が行われる前に、臨時生徒総会が開かれた。これは「茶道同好会の部への昇格」について開かれたもので、原田悦子さんによる理由説明の後、生徒側からの質疑がなかったので、即採決となった。採決の表決は拍手によるもので、ほぼ満場一致の承認をうけて「同同好会の茶道部昇格は決まった。

昇格の主たる理由として

○部員が多くなった。（現在十五名）

○部として正式に活動したい。

また、部になれるだけの活動をしてきた。

○物価高により、予算が個人の負担だけではとてもまにあわなくなった。

などが挙げられていた。

茶道部は、五十一年度に茶道愛好会として発足した。そして翌五十二年度に同好会となり、今回の部昇格に至っている。同部の今までの活動は、週三回の練習の他に能登祭では毎年お茶会を開いており、好評を博してきた。

同部新部長の雄崎成子さんは、「部に昇格したのだからまず以上にがんばって、日本の伝統文化の一つである茶道の道を歩めていきたい」と抱負を語ってくれた。

全県出場ならず

去る八月二十四日、大館市民体育館で吹奏楽コンクール県北大会が行われた。高等学校Aクラスに出場した本校は銀賞で、惜しくも全県大会出場にはならなかった。

午後一時半の高校の部Aクラスが開始と共に、本校は演題曲「北海の大漁唄」に続いて自由曲「吹奏楽のための哀歌」を演奏した。昨年の Bクラスで本校は金賞を受賞しているだけに今大会も期待されたのだが、結果は校中四位とあまり奮わなかった。初のAクラス出場で練習時間も短かった上に、楽器が増えたものまだ十分になじまれなかったようだ。

今大会について吹奏楽部部長の畠山雅哉君は「演奏前、やはり初めてのAクラスということで多少の不安はあったが、昨年がすばらしい成績だったのだから」と思っていた。しかしAクラスの壁は厚かった。来年は全県大会へ出場できるようにがんばってほしい」と語ってくれた。また同部顧問の浅野洋一先生は「今年はだた人数が増えただけのような演奏だった。今から練習に励んで、来年こそ全県出場を果たしたい」とおっしゃっていた。

同部は"全県出場"を目指してすでにその準備にかかっている。本校でも伝統ある部であるだけに、今後の活躍が期待される。

三点

▼十月一日は会社訪問の解禁日。これからきびしい就職戦線がくりひろげられる。今年は例年より明るいといわれながらも、女子大生は、依然きびしい状況にある▼日本リクルートセンター、この七月段階で採用を明らかにした上場企業の実績をまとめた「採用計画調査」によると、来春業界大卒男子の採用予定は、ことしの春にくらべ、二十三・七パーセント増。しかし女子大生の方は、八十二・九パーセントは採用予定だしとのこと。しかも女子学生の採用にはいろいろな制約がつく。浪人不可、自宅通勤一時間以内、なかには身長を指定するところもあるという。ある大学の女子学生に就職試験のために美容整形したという人がいるが、その気持ちもわかる。このように女子大生の就職はかなりきびしいといえる。いったい何故こんなにも女性が差別されるのだろうか▼これに対し企業側は女性に腰が軽く根気がないといっている。しかしその原因は企業側にある。女性を子アルバイトやパートなど不安定な身分で雇い、正式な社員として採用しても専門職を与えず、男子のわき役みたいに使っている。女性を根気がないという前に、女性に男性と平等にやりがいのある仕事を与えるべきである。チャンスを与えないで女性差別するのは、企業側の偏見にすぎない▼"キャリアウーマン"、"女の自立"とマスコミが騒ぎたてても就職戦線は依然、男尊女卑という古い考えがはびこっている状態である。男女同等の教育を受け、技能を練磨し、精神的にも技術的にもまた女性の能力は格段の進歩を遂げているはずである。にもかかわらず職業上差別するのは全く不合理としか言いようがない▼急激には変わらないだろう企業側もっている旧態然とした偏見とそれに対する世間一般の安易な妥協をそろそろ一掃してもいいのではないだろうか。